# 『哲学探究』の「序文」を真剣に読む

鬼界彰夫

過去十年近く、筆者はウィトゲンシュタインの『哲学探究』の読解に関わり、その全体の構成と執筆の意図をできるだけ明らかにすることを試みてきた。それを緩い主題的な関連しか持たない雑多な考察の集積や未完成の原稿としてでなく、(ウィトゲンシュタインの要求する基準に照らすと完璧ではないかもしれないが、少なくとも）完成された、そして（我々が慣れ親しんでいるものとは異なるかもしれないが）明確な構造と制作意図をもった作品として解釈することを試みてきた。この作業が進む中で筆者が繰り返し考えたことがある。それはこの書物の序文が、筆者が当初思っていた以上に『探究』という書物を忠実に反映しているのではないか、ということである。この考えには、それが生まれた背景がある。それは現行の『探究』の「序文」は元々中間版[(1)] のために描かれたものであり、最終版である現行『探究』の内容とは完全に一致しないという筆者自身も共有していた一般的な想定である。そしてこの背後にはより漠然とした想定があるように思われる。それは序文、本文を含む全体としての現行の『哲学探究』という書物は未完成で不完全なものだという考え[(2)] である。ある意味でこの想定は解釈者にとっては有難いものである。整合的な全体的解釈が困難な場合、常に言い訳となるのだから。それゆえにそれは解釈者としては、否定しがたい明確な根拠が示されるのでなければ[(3)]、頼るべきでない想定であると筆者は考える。つまり筆者が上記の考えを抱くようになったのは、自分が不必要にこの想定に頼っていたことを序文と『探究』の一体性に気づくことにより自覚したということである。本論では、序文を巡るこれまでの想定を批判的に再検討しながら、序文と『探究』本文がどこまで一体となったものと解釈できるのかを探りたい。それは、不完全あるいは未完成と想定していたものを完成品として見ることにより、我々がいかに以前は考えもできなかったような新たな思考と出会えるのかを示す試みでもある。

## 1. 『探究』の「序文」は最終版向けのものではないのか

現行『探究』「序文」に関して広く行き渡っているように思われる前提は、それは元々中間版に対して書かれたものであり、最終版に対して書かれたものでなく、従ってその内容が本文と一致しなくとも無理はない、というものである。この序文が元々中間版向けに書かれたものであることは事実である。しかしそこから、だからそれは最終版向けの序文ではない、と直ちに結論付けることはできない。そこには隠された前提がある。筆者がこの

前提を問題視するのは、序文で言われていることが『探究』本文に当てはまっているのかどうかの判断が微妙な場合、この前提によって我々が両者が適合しうる様々な可能性について考えず、最も当たり前のパターンのみを想定する結果、序文は本文に当てはまっていないと安易に考えがちだからである。この前提は我々が自分たちの気づかない前提の内部に留まることを促進してしまうのである。この前提の妥当性を吟味する前に、『探究』の序文の来歴をベーカーとハッカー[(4)] の叙述に従って簡単に振り返ろう。1936 年に『探究』を書く試みを始めてから、ウィトゲンシュタインはおびただしい数の序文の草稿を様々なノートに書きつけている[(5)] が、それがタイプ原稿として最初に結実したのが TS225 であり、1938 年 8 月の日付を持つこの序文は明らかに戦前版向けに書かれたものであり、大筋において現行『探究』の序文と一致する[(6)]。ただし『探究』を『論考』の考察と一緒に出版するという考えはここではまだ述べられていない。その後 1945 年 1 月には、中間版（それはおおよそ現行『探究』の§§1–421 に対応）が完成し、その冒頭に現在の「序文」が位置していた。こうして成立した中間版のタイプ原稿の末尾に、相当の原稿を付加し、同時に途中にもかなりの原稿を挿入し、必要に応じて相当の修正を加えた結果が現存する TS227 と呼ばれるタイプ原稿であり、それに忠実に即して刊行されたのが現行の『探究』である。従って、TS227 と呼ばれるタイプ原稿には、中間版のタイプ原稿にウィトゲンシュタインが加えた書き込みや修正、挿入されたページや紙片が、そのまま痕跡として残っている。そうした痕跡は出版された書籍からは消され、更に『ベルゲン電子版遺稿全集』(Wittgenstein, 2000)[(7)] においても普通版からは消されているが、原文版及びファクシミリ版には保存され、とくにファクシミリ版ではタイプ原稿へのウィトゲンシュタインの手書きの書き込みをそのまま見ることができ、最終版作成時に、既に存在していた中間版テキストにどれだけ手が加えられたかを如実に知ることができる。そして序文もその例外ではない。

今 TS227 のファクシミリ版で序文を見てみよう。まず目につくのは元のタイプ原稿（中間版）の冒頭に位置している「モットー」（それはヘルツ『力学原理』の序論からの引用[(8)] である）がバツ印で消され、代わりに手書きで現行のネストロイの引用が記されていることである。その後、小さな修正や書き込みがいくつかあり、最終段落にはかなり大きな修正が施されており、現行序文の最終段落がそうした推敲の産物であることを知ることができる。つまり現行の序文は、確かに最初中間版の序文として書かれたのであるが、その後最終版作成の際の土台となり、そこで必要な修正は、その大小によらず、施されているのである。つまりそこで無修正で最終版に残されたものは、最終版の最終内容として確認済みなのである。それゆえ、モットーのように、完全な差し替えが必要と判断された場合に

は、その部分全部が削除されているのである。そして同様のことは最終版 (TS227) の本文についても言える。全く修正のない部分が長く続く場合もあれば、§§89-133 に見られるように、中間版テキストに大幅な変更（削除、挿入、並べ替え）が施されて最終版となっている場合もある。明らかにこれらは、最終版作成時にウィトゲンシュタインの徹底した編集作業が加えられ、変えるべきは変え、削除すべきは削除し、そのまま残すべきところは残す、という過程の最終結果だと考えられる[9]。従って序文についても、今ある内容はこうした作業の結果であり、すべてがそのように意図されたのだとまずは解釈すべきだと考えられる。(繰り返すが、モットーが象徴するように、変えようと思えばどのようにも変えられたのであり、場合によってはウィトゲンシュタインはそのようにしたのである。) 以下においては序文のこうした解釈を前提として、それがどこまで本文と一致しうるのか、とりわけこれまで一致しないと考えられてきた部分に関して検討しよう。

## 2. 「数学の基礎」は『探究』の主題ではないのか

もし序文が『探究』本文と、ある仕方（それは我々が通常前提している仕方とは限らない)で一致しているなら、その内容は本文の理解に対して大きな助けとなると考えられる。そしてそうした助けの第一の候補は、序文第一段落で列挙されている『探究』の六つの主要な主題[10] である。なぜこれが大きな助けとなる可能性を持つかと言えば、『探究』本文には何の区切りも、見出しも存在せず、しかも多くの場合、一つ一つの考察が同時に複数の主題（問題）に関わっているため、全体として著者がどのような主要主題の下位問題としてそれぞれの議論を行っているのか見えにくいからである。他方、もし本文の様々な議論が六つの主要主題の下に統合されるならば、我々は全体をどのように区切り、どのような主題の転換が行われているのかという書物全体の構造と趣旨に関する大きなヒントを手に入れることになるからである。今日まで解釈者の間で序文のこの部分はこうした意味を持つものとして重視されてこなかった。そして明らかにその理由は、列挙されている主題の幾つかが本文のどこで論じられているのか明確でなかったからであろう。その最たるものが六つの中で最後に挙げられている「数学の基礎」である。通常の「数学の基礎」の理解に立つ限り、現行の『探究』のどこでそれが主題的に論じられているのか読者は戸惑わざるを得ない。例えば戦前版では、その後半 (TS221) で数、関数、図形、数列、推論といった主題について集中的に論じられており、そこでの主題が「数学の基礎」だと言われても誰も戸惑わない[11]。そうした、我々が通常「数学の基礎」として期待するタイプの議論が存在しないから、『探究』では数学の基礎は主題的には論じられていないと解釈者たちは考えてきたと思われる。ベーカーとハッカーは序文の詳細な解説において、数学の基礎が

『探究』本文で扱われていないのに序文で主要主題として列挙されている理由を次のように説明しようとしている。

> ここでウィトゲンシュタインが触れている主題の中で、数学の基礎が『探究』で論じられていないのは注目に値する。しかし、1945 年の中間版（フォン・ライトによって確定された）は TS221 から取ってきた短い節 (TS242, pp. 135-43) 、すなわち数学の哲学に関する議論を含んでいた。この主題が人を惑わせるような形でここに列挙されているのは、このことによって説明できる。(Baker & Hacker, 1983, p. 7：強調は筆者)

筆者には、彼らがここで二つの誤りを重ねて犯しているように思われる。先ず彼らは『探究』で数学の基礎が論じられていないこと、言い換えるならウィトゲンシュタインの数学の哲学がそこでは示されていないことを端から前提してしまっている。それはウィトゲンシュタインの数学の哲学とは、彼の死後弟子たちにより編集出版された『数学の基礎』に見られるような形をしているはずだという前提に立っているからである。その後の彼の考察の進化により、数学の哲学の意味と取るべき形が彼にとって根本的に変化したという可能性を考慮していないのである。第二に、こうした序文と本文の齟齬を説明するために、中間版ではそうした数学の基礎に関する考察が含まれており、この序文は元々中間版のために描かれたのだからここに数学の基礎が挙げられている、すなわちウィトゲンシュタインが最終版の編集段階でそれを削除し忘れた、と彼らは言おうとしているのである。上で見たように、『探究』最終版に対するウィトゲンシュタインの執念と徹底した編集を考えるなら、もし序文の「数学の基礎」というフレーズが削除すべきものなら、それを彼が見逃したということはおよそあり得ないと思われる。それは残すべくして残されたのであり、最終版『探究』は、彼にとって本当の意味で数学の基礎を哲学的に論じた書物なのである。少なくとも我々はこうした前提からどこまで進めるのかを試みるべきだろう。この想定が全くの妄想でないことを次に示したい。

『探究』で「数学の哲学」について明示的に語られている場所が二つある。そこでウィトゲンシュタインが言おうとしていることを真剣に受け止めるなら、『探究』がどのような形で数学の基礎に関して語っているのかに関する一つの手掛かりが見いだせるだろう。第一はいわゆる「私的言語論」の真っただ中で、痛みの同一性が問題になるとき、哲学者が「同じ」を「同一」で言い換えようとする傾向を揶揄しながら、次のように述べられるくだりである。

> この置き換えが哲学をする上で問題となるのはただ、ある特定の表現を使おうとする誘惑を心理的に厳密に描写することが我々の課題である場合のみである。もちろん、そうした場合に我々が言いたい「誘惑にかられる」ことは哲学ではなく、哲学の原材料である。すなわち、例えば、数学者が数学的事実の客観性と実在性について言いたくなることは、数学の哲学ではなく、哲学が取り扱う（治療する）べき事柄なのである。(『探究』§254)[12]

ここから読み取れるのは、『探究』においてすでに哲学観の大きな転換（それは「数学の哲学」観の転換でもある）がなされており、通常の意味での（そしておそらく『論考』の意味での）哲学（それはここでは「哲学者が言いたい誘惑にかられる事柄」と言われる）は、哲学ではなく、哲学が扱う材料と見なされているということである。すなわち、『探究』の序文を我々が読み、「数学の基礎」が主題として論じられているということを目にしたときに我々が『探究』の中にあると期待するものは、『探究』の著者にとってもはや哲学ではなく、哲学の材料、すなわちなぜ哲学者や数学者は数学的事実や数学的対象についてそのようなことを言いたがるのかという問いの材料なのである。ではそのような哲学とはどのような目的を持つどのような営みなのか。この問いに答えるのが、哲学と論理を主題的に論じる一連の考察の中で登場する次の考察である。

> 数学的発見や数理論理学的発見によって矛盾を解決することが哲学の仕事なのではない。そうではなく、我々を不安にしている数学の状態、矛盾が解消される前の数学の状態全体を見渡せるようにすることが、哲学の仕事なのである。（そして、そうすることによって我々は困難を避けているわけではない。）(『探究)§125)

ここでウィトゲンシュタインは、数学で生じた矛盾（例えば、ラッセルのパラドックス）に関して、数学の哲学の役割とは、それを解消すること（例えば、タイプ理論を提案することにより）ではなく、矛盾が生じている哲学の状態を見渡せるようにすることだ、という。なぜ、どのような意味でそれが数学の哲学なのだろうか、それが分かれば『探究』で「数学の基礎」によってどのようなことが意味され目指されているのかが見通せるだろう。そしてこれに続くテキストこそ、それを次のように明らかにしているのである。

> ここには次のような根本的な事実が存在している。つまり、我々はあるゲームのための規則と技法を定めているのだが、その規則に従う際に想定していたのとは違った

事態が進行しているのである。つまり、いわば我々は、自分たち自身の規則に絡まってしまっているのである。

自分たちの規則へのこうした絡まりこそが、我々の理解したいものであり、見渡したいものなのである。(『探究』§125)

「我々はあるゲームのための規則と技法を定めている」という表現が示しているのは、ここで数学が、人間が言語を用いて行っている社会的実践の一つとして、すなわち『探究』で示された言語ゲームの一つとして理解されている、ということである。「規則と技法」という言葉が示唆するように、それは人間の行うさまざまな言語ゲームの中では、厳密な規則と、行為者間の結果が一致するような技法、すなわち計算によって特徴づけられる。これら二つの節の考察から読み取れる『探究』の「数学の哲学」観とは、こうした実践において数学固有の概念・規則・技法を巡って生じる、一見すると実践を阻害するように見える問題、矛盾、パラドックス（それらはここで「自分たちの規則への絡まり」と呼ばれている）に対して、それらが数学という実践とどのようにかかわるのか、それらを生み出す概念や規則をそもそも人間は数学という実践において何のために使っているのか、を明らかにすることが数学の哲学の役割であり、それは現実に数学実践に参加する人間（様々な目的を持った計算者と新しい計算技法の創造者としての数学者）が本来の目的のために数学実践を滞りなく続けることを助けるのである。そしてこうした観点からするなら、数学という実践に無視できない様々な概念的問題をもたらす重要な諸概念（我々が「絡まりがち」な概念）の中で最も重要なものが「規則」と「無限」であるということができるだろう。従ってこれらの概念が数学という実践においてどのような役割を担い、そしてそれについて実践を行う傍らで数学者やあるいは哲学者がどのようなことを言おうとするのか、それがパラドックスや問題の発生とどのように結びついているのか（それらに我々がどのように「絡まって」いるのか)、を明らかにすることは、『探究』的な意味では極めて重要な数学に関する哲学的考察ということになろう。そして『探究』§§185-242（いわゆる「規則論」と呼ばれる部分）の諸考察は、文字通り「規則」と「無限」に関わるそうした問題を扱っているのであり、その意味で数学の哲学、あるいは数学の基礎に関する考察、と呼ぶことができるだろう。

もちろんこうした筆者の見解は、そこで示された「規則」と「無限」に関する考察の中身と、その数学的実践とのかかわりを明らかにしたときに初めて完結するものではある。しかし少なくともこうした見通しが存在するということは、『探究』「序文」が「数学の基礎」と言っているのに、通常の意味での「数学の哲学」らしきものが本文に見つからない

といって、『探究』で「数学の基礎」は主題的には扱われていないという前提を無批判に受け入れるべきでないことを示している。そして同じことは「序文」で示されている他の五つの主題についても言えるだろう。「論理という概念」であれ、「意識の諸状態」であれ、それらの言葉から我々が通常連想するような議論（あるいは『論考』で存在したような議論）をさがすのではなく、現に『探究』で展開されている議論が、『探究』という新しい見地からはそうした主題に関する考察とみなされるのだということを指針として『探究』を解析し、解釈しようとすれば、『探究』が示そうとしている根本的に新たな視点を見出すことへと一歩近づくと思われる。

3.　『探究』において「新しい思考と『論考』の古い思考の対比」は存在しないのか

次に「序文」と『探究』本文の間の整合性に関する最大の問題について考えよう。それは序文の次の部分に関するものである。

> だが四年前、自分の最初の書物（『論理哲学論考』）を読み直して説明する機会を得た。そこで私には突然、あの古い思考とこの新しい思考を一緒に公にすべきだと、これは私の古い考え方と対比し、それを背景とすることによってのみ、正しい照明が当てられるのだ、と思われたのである。
>
> すなわち十六年前に再び哲学に関わり始めて以来、あの最初に書き記したことの中に私は幾つもの深刻な思い違いを認識せざるを得なかったのだ［以下段落の残りでは、そうした誤りに気づく上でラムジーやスラッファから多くの助けを受けた事情が語られるが省略］（『探究』序文）

筆者自身序文のこのくだりには強い違和感を覚え続けてきた。結局全体として何が言いたいのかがつかみにくいからである。序文のこの部分が『探究』という書物に関して述べていることは次の三点に要約できる。

１）この新しい思考は『論考』の古い思考と一緒に公にすべきだと思われた。
２）この新しい思考は古い思想との対比によってのみその真価が理解されると思われた。
３）この新しい思考を形成する過程で『論考』の内容にいくつもの重大な誤りを認識した。

我々を惑わすのは１）と２）、３）の関係であり、それは究極的に、１）で言われる「あの古い思考とこの新しい思考を一緒に公にする」というのが具体的に何を意味するのか、と

いう問題に行き着く。この点を明らかにするためにこれら三点を順に検討したいが、内容の連関からするなら３）から始めるのが適当だろう。３）が『探究』本文の内容を忠実に反映していることは明らかである。前半部で『論考』の言語観や諸概念が繰り返し批判されるからだ。そして３）が正しい限りにおいて、２）で述べられていることが極めて妥当であることも明らかだろう。つまり３）が示唆しているのは『探究』の新しい思考は『論考』の古い思考の誤りを正す中で形成されたということだから、それを正当に理解する最良の方法が古い考えとの対比であることは極めて当然と思われるからだ。従って我々は３）と２）から、『探究』の新しい思考が真に理解されるためには、それを古い思考と対比することが必要あるいは重要だ、という結論を導くことができる。問題はその「対比」が現実に『探究』で行われているかどうか、どのような形で行われているかであり、それを述べているのが１）だと思われる。しかしここで我々は大きな障害にぶつかるのである。３）と２）の内容が『探究』に対して持っている重大性を考えるなら、この「対比」が『探究』で実現されていないという事態は、著者に何か外的な不可抗力が加わらない限り理解しがたいことである。自分の新しい思想を表現する書物を作成・完成させる過程で、その真価が理解されるために決定的な手段を用いないことはおよそ考えられないことだからである。しかしながら１）の内容を述べている部分を独立に読むと、この手段が用いられなかったかのように思えるのである。それは「あの古い思考とこの新しい思考を一緒に公にする」という表現から我々が自然に考える解釈が『探究』と『論考』を合本として一緒に出版することだからである。しかしながら、このように解釈する限り、２）、３）から導かれた『探究』が理解されるために必要な手段は結局用いられなかったことになり、『探究』の著者におよそ不可解な著作行動を押し付けることになる。従ってウィトゲンシュタインが『探究』最終版を作成した一連の行動が理解可能なものだと考えようとするならば（もしそうでなければ、その難解さにもかかわらず、それを理解しようとする我々自身の解釈行動は理解不可能なものになる）、１）に対して可能な限り別の解釈（それが『探究』において実現されているとみなせるような解釈）を我々は試みるべきだと思われるのである。しかしながら現実には、１）が『探究』の『論考』の合本計画を意味するという解釈は、極めて広く行き渡っている（ほとんど何の疑問も呈されずに）[13]。

この解釈が当然のこととして広く行き渡って来たことには、はっきりした理由が存在する。それは他ならぬウィトゲンシュタイン自身が一時合本計画をケンブリッジ大学出版局に持ち込み、了解を得たという事実[14]が存在するからである（しかしこの計画は後に放棄された）。しかも彼にこの合本計画を思いつかせたのが 1943 年にニコラス・バクチンと行った『論考』の読書会であり[15]、この出来事は序文の引用部分で「自分の最初の書物（『論

理哲学論考』）を読み直して説明する機会」と呼ばれているものなのであるから、以上の背景的事実と共に序文を読めば、「あの古い思考と新しい思考を一緒に公にする」というのが合本計画であると考えるのは極めて自然なことなのである。しかし先に示したように、もう一歩踏み込んで、ウィトゲンシュタインがこの合本計画を「古い考えとの対比」の手段として考えていたのだと想定すれば、彼は『探究』の中間版あるいは最終版が完成したあと、自ら「それに正しい照明を当てる」唯一の手段と考えたことを実現するために何の行動も（起こせたのに[16]）起こさなかったことになり、『探究』の完成に彼が費やした時間とエネルギーを考慮すれば、彼の行動は理解不可能と言わざるを得なくなるのである。このことが意味するのは、序文の当該部分に関する以上の解釈には根本的な問題が含まれているということである。そしてその問題の根源は、序文のいう新しい考えと古い考えの「対比」を、1943 年にいったん試みられた合本計画とあまりにも短絡的に直結させたことにあると思われる。両者の間に何らかの中間項が見つかれば、合本計画が放棄されたという事実と、序文に言われている新しい考えと古い考えの「対比」の不可欠性が両立すると考えられる。この隠れた中間項を見出すために、関連する出来事の時系列を冷静に振り返ってみよう。

1938 年、『探究』戦前版が完成し、8 月には現行の序文の原型とみなせる序文 (TS225) が書かれた。しかしそこでは新旧の著書の合本や対比への言及は一切存在しない。その後 1943 年にバクチンとの読書会を契機として合本のアイデアが生まれ、ウィトゲンシュタインは出版局にそれを認めさせたが、その後計画を放棄した。我々にとって重要なのは、この時に彼に生まれた考えが何であり、それがその後どのように変化あるいは進化したのか、そしてそれが彼の現実の著作行動とどう関係したのかである。この時に最初に生まれたのが合本計画（おそらくは何らかの形で両著を対照させるような合本計画）であることは、この時期にいくつもの序文の下書きが書かれた MS128 と MS129 [17] の最初の 10 ページの記述からかなりの確度で推定できる。ベーカーとハッカーが指摘する[18] ように、MS128 の最終ページには二行に分けられた「『哲学探究』　『論理哲学論考』と対照させた」という乱雑な記入があり、当時交渉中だった合本のタイトルの一案ではないかとも考えられる。そしてこのことは MS128 に続けて書かれたと思われる MS129 冒頭部の序文の草稿群からも読み取れる。この中の最初の草稿の、先に引用した部分に対応する部分は次のようになっている。

> 二年前に『論考』の一部を読み説明する機会があった。その時突然、自分はこの本と新しい思考を一緒に公にすべきだ、そして『論考』の哲学的思考様式と比較し、それ

を背景とすることによってのみ新しい思考はその本当の意味を手に入れることができるのだと思われた。(MS129, pp. 3r-3v：下線は原著者)

現行の序文との比較で注目すべきは、ここで「この本と新しい思考を一緒に公にすべき」（下線筆者）と、『論考』との合本計画が明示的に語られていることである。従って、最初に彼にひらめいたのは明らかに合本というアイデアであり、その時はそれこそが新旧の比較の手段と考えられたのだと思われる。しかし興味深いのは MS129 冒頭部の第二の草稿ではこの部分が、「あの古い思考とこの新しい思考を一緒に公にすべき」（下線原著者）と変えられ、現行の序文の表現と同じになっていることである。この二つの草稿の表現の相違が意味することは明らかである。第一草稿の表現（「この本と新しい思考を一緒に」）だと何らかの形の合本と解釈せざるを得ないが、第二草稿と現行の序文の表現（「あの古い思考とこの新しい思考を一緒に」）なら、合本と解釈することは可能だが、それ以外の方法の可能性も含まれるのである。序文草稿のこの変化と、合本計画をウィトゲンシュタインが放棄したという事実、そして、にもかかわらず現行の序文では新旧の思考の対比の不可欠性が語られているという事実を合わせて考えると、次のような可能性が、一つのありうるシナリオとして浮かび上がるのである。バクチンとの読書会を契機としてウィトゲンシュタインは新旧の思考の比較・対比の重要性に気づいたが、当初は何らかの形の合本（両著の命題間の対照を含む可能性が高い）がそのための最良あるいは唯一の手段と思われ、その実現のために積極的に行動したが、同時にそれは彼が戦前版から中間版へ移行する過程であり、思考の深化の過程でもあったのであり、その過程で合本以外の比較の手段に思い至り、その結果合本計画を放棄し、同時にその考えに沿って中間版の核心部を書き、それと前後して現行の序文の原型が書かれた。つまり中間版を土台に作成された最終版には、合本によらない新旧の思考の比較の手段が用いられているのであり、従って現行の序文の内容と、合本計画が放棄され、その後二度と顧みられなかったという事実は完全に両立するものなのである。

これはあくまで一つの想定でしかない、しかし『探究』の序文と本文を整合的に読むことを可能とし、その全体的完結性を支持する想定であり、『探究』を真剣に読もうとするなら可能な限り追及するに値する想定だと考えられる。そればかりではない。これは『探究』の核心部（§§198-421、中間版核心部に対応）を解釈する上で、我々を積極的に助けうる想定、すなわちそれがない場合には謎にとどまることが、それによって解かれうる想定でもあると筆者は考える。その謎とは核心部固有のある文体である。もし『探究』の著者がその叙述において自分の今の思考を『論考』の過去の思考と対比させようとする場合、通

常考えられる手段は、原文を引用するか（これは合本という計画に他ならない）、内容を適宜要約するかの二つだが、明らかに『探究』核心部ではいずれの方法も用いられていない。その代わり核心部では、それ以前の部分では見られなかった特異なスタイルで叙述が進行しているのである。すなわち著者の新しい思考が示される際に、先ず「」の中に同じ主題に関する異なった考えが示され、しかもそれに対する直接の説明（誰の考えであるとか、これを著者がどうしようとしているのか、等）は一切示されず、いきなり段落が改められて、その考えに対する質問、反論、コメント等が続き、結果として新しい考えが示されるというものである。しかも「」の中で示されるのはある見解や理論を規定する哲学的命題であるというよりは、そうした見解を抱いている人間がつい発したくなるような言明、いわば思考や思想の表出というべきもの [19] である。こうした表出は『探究』の叙述の進行において、ある場合は分析や考察の対象として、ある場合には対話者の言葉のごとく扱われ、通常の哲学的テキストには見られない自由さ、身軽さを著者が駆使するための手段になっているように思われ、確固とした解釈を施そうとする読者を大いに戸惑わせるものである。しかし、もしこの独特のスタイルが、序文に言う「(新しい）思考を私の古い思考と対比する」手段なのだとすれば、我々は新しい展望をもってそれに臨むことができるだろう。すなわち『探究』核心部の考察の冒頭でしばしば「」内で示されるのは、著者の論述の都合で批判の対象や例として持ち出されるものでなく、『論考』という著者自身の古い思考様式を持ち、それに捕らわれている精神が、自己の思考の自然な、あるいはやむを得ない表出として発する（あるいはウィトゲンシュタイン自身が現に発した）言明と系統的に解釈すべきものであるならば、一見雑多に見える様々な考察も、すべては『論考』という自己の過去の思考様式を克服し、それから脱却する努力の一環とみなせるだろう。すなわち『探究』の著者による『論考』の思考の批判と克服は「言語ゲーム」という概念の提示と使用において完結したのではなく、『探究』核心部で見られるような思考の表出が「」内でまず提示されるという叙述スタイルが維持されている限りは、なお継続されているのだと考えることができるだろう[20]。

註

(1) 本誌の読者には改めて説明する必要はないかもしれないが、フォン・ライトが明らかにしているように『哲学探究』という書物は三段階のプロセスを経て完成し、それぞれの段階の『哲学探究』のヴァージョンが存在する。それらは通常戦前版、中間版、最終版、と呼ばれ、我々が現在『哲学探究』という書物として扱っているのが最終版である。戦前版の最終タイプ原稿は TS220（前半）、TS221（後半）として現在も存在する。それに対して最終版が中間版のタイプ原稿を元にして作成されたため、中間版のテキスト自体は存在しない。それは物理的に最終版に吸収されたと言える。詳しくは von Wright (1982) を参照されたい。

(2) 例えば野家啓一氏は、『探究』最終版を、「生成し増殖するテクストの一つのヴァージョンにすぎず、

あくまでも「途上の」作品」としている。野家 (2013, p. xv)
(3) 前注で言及した見解の根拠として野家氏は、「フォン・ライトやアンスコムの証言によれば、この「最終版」を書き上げたあとも、ウィトゲンシュタインは『探究』の別ヴァージョンを作成する試みをやめなかった」ことを挙げている。しかし前掲論文でフォン・ライトは、最終版において中間版へ考察を付加する際のソースとして様々な手稿を元に作成されたタイプ原稿'Bemerukungen I' (TS228) の作成後、それの並べ替えである'Bemerukungen II' (TS230) の作成に触れてはいるが、それらの作成意図が『探究』の「別ヴァージョン」を作ることであったということには明らかな無理がある。また同論文ではウィトゲンシュタインがそれから時を置かずに MS130 で旧『探究』第二部につながる考察を開始していることも述べられており、フォン・ライトが「別ヴァージョンを作る試み」と言えるものを認めていたかは疑わしい。他方アンスコムが『探究』第一版の編者序文で示した、『探究』の最後の部分は旧『探究』第二部と統合されるはずだったという想定は、旧『探究』第二部が『探究』とは別の書物であると現在広く考えられている（Wittgenstein (2009), 'Editorial Preface'参照）ことからも、もはや高い信ぴょう性を持っているとは考えられない。現行『探究』が野家氏のいう意味での「「途上の」作品」と考えるべき積極的な根拠が存在すると筆者は考えない。
(4) Baker & Hacker (1983, pp. 10–15)
(5) Baker & Hacker (1983, p. 10)
(6) Baker & Hacker (1983, p. 10)
(7) Wittgenstein (2000) に収められた全遺稿は、それぞれ三つのヴァージョンを持つ。遺稿を活字に起こし、読解に便利なように異文や修正の跡を削除した普通版 normal version、原テキストの異文や修正の跡を忠実に記号で表現した原文版 diplomatic version、原テキストの写真から成るファクシミリ版の三つである。
(8) 当初モットーに用いられたのは次の文章。「この苦痛な矛盾が除去されても、実際に本性についての問いは答えられないが、もはや悩みのない精神は不当な問題を提出することを止める。」（ヘルツ, 1974, p. 26）
(9) 外的な締め切り等、好きなだけ編集を施すことを妨げる条件は当時の（そしてほとんど常に）ウィトゲンシュタインには存在しなかったと考えられる。
(10) ここで列挙されている六つの主題とは、意味という概念、理解という概念、文（命題）という概念、論理という概念、数学の基礎、意識の諸状態、である。
(11) 戦前版の序文には七つの主題が列挙されている。意味という概念、理解という概念、文（命題）という概念、論理という概念、数学の基礎、センスデータ、観念論と実在論の対立、である。戦前版の後半に相当する TS221（それは『探究』中間版からは削除された）は彼の死後遺稿管理人によって『数学の基礎』パートⅠとして出版された。
(12) 本論における『探究』からの引用はすべて鬼界訳。底本は Wittgenstein (2009)を用いた。
(13) 例えばベーカーとハッカーは序文のこの部分の解説で次のように書いている。「ウィトゲンシュタインは『論考』を 1943 年にニコラス・バクチンと共に読んだ（フォン・ライトの報告による）。[…]『探究』のあるヴァージョンを『論考』と合本にして出版するという考えはこの機会に生まれた。」(Baker & Hacker, 1983, p. 9)
(14) 『探究』を巡るウィトゲンシュタインとケンブリッジ大学出版局との接触の過程をフォン・ライトは出版局の記録に基づき詳しく伝えている。それによると最初の接触は 1938 年で、（おそらく戦前版の）出版の合意に達したが、この計画は立ち消えになる。ラッシュ・リーズによる戦前版前半の一部の翻訳が行われたのはこの時である。つぎに接触があったのは 1943 年 9 月で、「出版局は『論考』と合本にするという著者の条件に合意し」、この計画は 1944 年 1 月に正式に確認された。ウィトゲンシュタインのこの行動の理由としてフォン・ライトは、ニコラス・バクチンと行った『論考』の読書会における会話ではないかと推測している。この時出版局に提供された原稿に関しては、戦前版に相当の改定を加えた原稿であったのではないかとフォン・ライトは推定している（以上 von Wright (1982, pp. 121–122)、による）。事実が示すように明らかにこの計画もまた放棄された。そしてこれ以降は、中間版完成後も、最終版完成後も、ウィトゲンシュタインがケンブリッジ大学出版局や他の出版社と接触したといういかなる記録も残っていないとフォン・ライトはいう。つまり、中間版完成以降ウィトゲンシュタインは『探究』を出版するための積極的行動は全く行わなかったと考えられる。「ウィトゲンシュタインがなぜ出版計画を進めなかったのかは推測するしかない」とフォン・ライトは書いている（以上 von Wright (1982, p. 127)、による）。
(15) 前注参照。
(16) 1943 年のケンブリッジ出版局との交渉を考えれば、これは明白である。

(17) MS129 は最初の 10 数ページとそれに続く本体に分けられる。本体は 1944 年 8 月 17 日に描き始められて、中間版の核心部（『探究』§§198-421 に相当）の第一次草稿に当たる。それに対してこれに先立つ 10 数ページは異なる様式の紙であり、そこには序文の複数の草稿が存在する。
(18) Baker & Hacker (1983, p. 9)
(19) その一つの典型としては§253 冒頭の、「他人には私の痛みは感じられない。」という言明が挙げられる。
(20) こうした観点からすると我々は、ウィトゲンシュタインの完成したテキストの解釈に関してもう一つの結論を導くことができる。すなわち中間版以降に書かれたテキストで、もしそこで「」内に思考の表出を示すというスタイルが用いられていなければ、それは『論考』の思考様式を著者がすでに脱却した印と解釈できるということである。このことは旧『探究』第二部に当てはまる。

文献

Baker, C. P. & Hacker, P. M. S. (1983). *An Analytical Commentary on Wittgenstein's Philosophical Investigations*, vol.1, paper edition, Oxford: Blackwell.
ヘルツ (1974). 『力学原理』, 川上友好訳, 東海大学出版会.
野家啓一 (2013).「『哲学探究』への道案内」, ウィトゲンシュタイン, 『哲学探究』(vii–xxiv 頁), 丘沢静也訳, 岩波書店.
von Wright, G. H. (1982). 'The Origin and Composition of the *Philosophical Investigations*,' in G. H. von Wright, *Wittgenstein* (pp. 111–136), Oxford: Basil Blackwell
Wittgenstein, L. (2000). Wittgenstein's Nachlass The Bergen Electronic Edition, Oxford: Oxford University Press.
――――― (2009). *Philosophical Investigations*, revised 4th edition, Chichester: Wiley-Blackwell.

〔筑波大学大学院人文社会科学研究科教授・哲学〕